慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title　ファッツァーという出来事：
ベルトルト・ブレヒト『ファッツァー』：断片における<中断>

Sub Title

ファッツァーという出来事

――ベルトルト・ブレヒト『ファッツァー』 - 断片における〈中断〉

石見　舟

1　序論

本論文は、ベルトルト・ブレヒトの未完成戯曲『ファッツァー』[1] が、なぜ未完成のまま残されたにもかかわらず作者にとって重要な位置を占めていたのかを検証する。その理由として徹底的な〈中断〉があることを示したい。つまり、『ファッツァー』における〈中断〉とは、執筆が断続的になり、はては作品の完成が断念されるという成立史のことのみを指すのではない。むしろ、ファッツァーという人物と彼の仲間たちに起こる事件を描写すること、言い換えるならば歴史を記述する仕方の本質に見出されるものこそが〈中断〉なのである。それゆえに作者ブレヒトの試行錯誤は膨大な断片群として残されたのだ。本作の魅力は断片的であることによって削がれることはなく、むしろこの断片性によって〈中断〉を示すということにある。

『ファッツァー』は 1926 年から 30 年にかけて断続的に執筆された、第一次世界大戦の脱走兵ヨーハン・ファッツァーら仲間たちの破滅を描いた戯曲である。粗筋も執筆時期によって異同があるが、大筋は次のようにな

---

1) Brecht, Bertolt: W. Hecht u.a. (Hg.) : Werke. Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe. Berlin & Frankfurt am Main 1988-2000, Bd. 10, S. 387-529.（以下、全集版と呼ぶ）
以下本論文ではこのテクストを、最終的に未完成のまま残された断片群としては『ファッツァー』 - 断片、作者の構想にあった完成形としては『ファッツァー』と区別する。なお全集版の引用の際の出典は（GBA ：巻数／頁数）を直後に付した。

る。1918 年頃、第一次世界大戦西部戦線の激戦で死を予感したファッツァーら四人は、ファッツァーの機転によって脱走に成功する。脱走は軍法違反であるから、自国ドイツ軍に見つかれば銃殺刑は必須である。そこで仲間のうちの一人の故郷であるルール川沿いの街ミュールハイムへとやって来る。ここで彼の妻を加えて地下室での潜伏生活が始まる。彼らの唯一の望みは、ロシアで起こった革命がドイツにまで波及し、国家体制の転覆によって彼らの行為が是認されることである。しかしエゴイストと呼ばれるファッツァーは食糧調達の機会をわざと逃したり、妻と同衾することによって彼らの小さな共同体の秩序を乱すのである。仲間たちはファッツァーの粛清を決議するが、その時すでにドイツ軍に潜伏先が包囲されている。彼ら全員は殺される。

残された膨大な断片群は、五百頁以上と数えられる。テクストはタイプ原稿や手稿の形で記されており、図や新聞の切り抜きなども見られる。内容は、対話形式・独白形式・コロスのための形式で書かれた散文や韻文のテクストのみならず、作品全体の計画や、場面一つの、あるいは対話や独白の構想、登場人物の性格付けなどの案を記したものまで多種多様である。

さらに執筆の過程で戯曲の性格は様々に変換していった。全集版にしたがって、執筆過程を五つに分けてみてみよう――以下、これら制作期間を「第〇期」と称して説明する[2)]。第二期（1927 年 9 月）に集中的に執筆が進められ、第一期（1926 年 8 月～ 1927 年夏）のテクストを用いて、大まかな場面構成や七つの場面からなる『ファッツァー』 - 断片の中では最長のシークエンスが執筆された。コロスのテクストも登場する。第三期（1927 年末～ 1928 年春）では妻を巡る性の問題が多く扱われる。書き方としては、対話形式ではなく、演説（Rede）やコロスの登場人物たちの行為の注釈など省察的なものが増える。対話形式で「最終場」と題された場面が描かれるものの完結はしていない。このことについては後ほど詳細に述べたい。この時期、ノートの表紙に「ファッツァー・ドキュメント」

---

2) Knopf, Jan u. a. (Hg.) : Brecht Handbuch. Stuttgart 2001-2003, Bd. 1, S.167-178. ユーディット・ヴィルケによる『ファッツァー』の項目を参照。

（das fatzerdokument）と名前が付けられる。1928 年 8 月末『三文オペラ』が初演される。その後第四期（1928 年初秋～ 1929 年末）ではファッツァー・ドキュメントと対をなすようにして、「ファッツァー・コメンタール」（Fatzerkommentar）なるテクスト群が執筆される。ここではより省察的な側面が強調されており、ファッツァーらの事件を超えて、「考える人」という新しい人間の形象についての記述や、若者たちが演劇によって理論と実践の接続を試行錯誤する場としての「教育施設」（Pädagogien）についても考察される。第五期（1929 年末～ 1930 年春）にあたる 1930 年 6 月にブレヒトは個人誌『試み』第一号で「ファッツァー第三節」と題して部分三篇を発表した。第一、二節は追って掲載すると予告したが、『ファッツァー』の執筆はここで中断されてしまった。

この最終的な執筆中断は何を意味しているのだろうか。はっきりと分かるのは、ブレヒトが『ファッツァー』に芸術的限界を感じたからではなかったということだ。1939 年ブレヒトは自身の日誌に、戯曲『ガリレイの生涯』を「技術的には大きな後退である」とし、『ファッツァー』 - 断片と『パン屋』 - 断片を「最高度の水準で技術的」と評価している（GBA: 26 / 330）。それに留まらず、1951 年 7 月 10 日の記述では再び『ファッツァー』に言及している。ブレヒトは戯曲が歴史を扱う際の形式のために『ファッツァー』を参照するよう記している。この歴史記述の形式とは、「いかなる基本理念からも出発しないということ」（GBA: 27 / 324）と言い換えられており、これはブレヒトが断片性を評価していたことの証左であろう。また翌日 11 日には以下のように記している。「わたしの目の前に浮かぶのは、形式的なもの、である。つまりは巨大で手付かずな断片。」（GBA: 27 / 324）

さて、本作品はどのように受容されただろうか。ヴァルター・ベンヤミンによって登場人物ファッツァーが語られたものの――『試み』の収録部分だけを分析対象としていた事情もあって――詳細に論じられることはなかった[3)]。1978 年にハイナー・ミュラーはブレヒト・アーカイヴに通い詰

---

3) ベンヤミン「ベルト・ブレヒト」参照。特に『ベンヤミン・コレクション　1』、浅井健二郎編訳、筑摩書房 2011、529-530 頁。

めて手稿を編集し、上演版を完成させた。これが上演され再び大きな注目を集めることとなった[4)]。彼は『試み』を読んで以来『ファッツァー』は「羨望の対象」であったといい、「百年に一度のテクスト」と絶賛する[5)]。1997 年、全集版に『ファッツァー』を収録した第十巻第一分冊が並んだことで『ファッツァー』 - 断片の研究はますます盛んになった。

これまで『ファッツァー』 - 断片における〈中断〉の問題が全面的に論じられることはなかったが、重要な参照項となる研究を三つ挙げておこう。1998 年にユーディット・ヴィルケが『ブレヒト「ファッツァー」 - 断片――ドキュメントとコメンタールとの関係の読解』[6)] を発表。これは『ファッツァー』 - 断片についての最初の単著である[7)]。ファッツァー・コメンタールを、ファッツァー・ドキュメントの付属物として見なすのではなく、対等な地位を持ったテクスト群であると分析して、テクストの断片性を肯定的に捉えた。

演劇学者ハンス・ティース＝レーマンは 2000 年に「『ファッツァー』についての試み」[8)] のなかで、本作のドラマトゥルギーを〈あいだ〉(Zwischen) のそれと見抜く。どこにも行けない、何もできないという彼らの宙吊りの状況は中断に端を発する。また彼によれば必然的な破滅を救済する手段としてブレヒトは、ファッツァー・コメンタールにおいて教育と演劇の関係性を論じているという。容易には理解できないことを繰り返すことに演劇の教育的側面を見、ファッツァーらの物語の閉塞を有用なものに転換しよ

---

4) ミュラーの『ファッツァー』 - 断片への取り組みについては、津崎正行「ベルトルト・ブレヒトとハイナー・ミュラーの『ファッツァー』断片について」（所収：『藝文研究』108 号（2015）慶應義塾大学藝文学会、179-193 頁）参照。

5) ミュラー『闘いなき戦い』、谷川道子他訳、未來社 1993、249 頁。

6) Wilke, Judith: Brechts »Fatzer« - Fragment. Lektüren zum Verständnis von Dokument und Kommentar. Bielefeld 1998.

7) Stefan Mahlke の書評より。Brecht Jahrbuch „Brecht 100 <=> 2000“ (Nr. 24), S. 366-368.

8) Lehmann, Hans-Thies: Versuch über »Fatzer«. In: Ders.: Das politische Schreiben. Berlin 2012. 2. Aufl., S.296-306.

うとした営為をファッツァー・コメンタールのテクストをもとに読解していく。

根本萠騰子は『身ぶり的言語　ブレヒトの詩学』[9] で、ファッツァーを放浪する革命家と呼ぶ。後で詳しく述べるように、身振りの位相から、ファッツァーの落ち込む現在の孤立したあり方、彼ら脱走兵が試みる団結が結果的に全滅を導く様子を簡潔に捉えている。

上記の研究の共通点として、ファッツァーらの行き詰まりがそのまま戯曲を執筆する書き手の行き詰まりと重なることが確認される。そしてそれを乗り越えるために事件の描写ではなくて、理論による相対化、距離化が期待されている点も見出されよう。本論文では理論による出来事の救済以前の破滅的状況の具体的なあり方を探る。つまりドキュメントとコメンタールの相互関係からではなく、ファッツァー・ドキュメントの内部においてどれほど徹底的に中断が起こっているのかを見たい。この中断された事態が深刻であるからこそ、中断は単なる戯曲中の一装飾としてではなく、戯曲の形式としても扱われることになるのだ。つまり中断は『ファッツァー』 - 断片において筋のレヴェルから書き方のレヴェルに至るまで通奏低音のようにして働いているのだ。まずそのためには中断という概念が具体的に指し示している事柄をしっかりと見定めなければならない。

2　本論

2.1 中断概念について

ある行為が何らかの原因によって停止するとき、「その行為は何がしによって中断された」という。このことが意味しているのは、行為の目的が、つまり行為によって成し遂げられるはずのある結果が現実化されないということである。目的論でいえば、事物は目的とそれに到達するために用いられる手段によって考えられる。目的によって関係づけられた諸手段、すなわち秩序付けられた過程が中断されると、目的と手段の関係性が揺らぎ、ただ手段だけが認識の対象となるのだ。つまり、それまで目的によって評価を受け、正当化されてきた手段は、中断によって、今や正当性の根拠あ

---

9)　根本萠騰子『身ぶり的言語　ブレヒトの詩学』、鳥影社 1999。

るいは評価の基準を行為そのものから導き出すよう求められる。中断は目的論的思考方法を破綻させ、手段を手段そのものとして認識することを可能にする。これが中断の一つ目の性質である。

例えば机を製作するという目的は、木を切り倒して木材を作り出すこと、それらをつなぎ合わせるための釘や金槌などを製作することを正当化する。そして行為のひとつひとつは、机製作のための「手段」として了解される。もしこの製作過程のなかに机を製作することに資することのない行為があった場合、それは評価を得ず、手段として正当化されない。机製作の目的が中断され達成されなくなったとき、それまで見過ごされてきた樹木伐採という手段の内実がにわかに露呈することとなる。そしてその是非はこの行為の内実によってのみ判断されるのだ。

ファッツァーらの物語において、中断は彼らの生存の条件であるといえる。西部戦線に配属された彼らが生き残るためには脱走以外に選択肢がなかったからだ。また、脱走兵となって生き残るために、自分たちが犯した軍法そのものが無効になる出来事、すなわち革命が起こらなければならないというのも同様に彼らにとって唯一の生存の条件であるといえる。戦争の勝利という目的のために組織された軍隊という機構を中断することによって、コマのように戦争の手段として扱われる兵士たち一人一人が浮き彫りになる。そして彼ら一人一人の生存がなによりも重要な問題として認識されるのである。そして軍隊の中断と比較してみれば、国家機構の中断は民衆の生存を確かなものとする出来事であるといえる。というのも、同様の仕方で、今度は民衆一人一人の生存そのものが戦争の勝敗よりも重要な問題であることが分かるからである。ここにおいて、中断は革命の条件であることが分かる。革命は時の政治体制を倒すのだが、それは自身の存続を目指す国家機構からは当然生まれえないものである。ここで中断のもう一つの性質が明らかとなる。中断は通常の行為の範疇では捉えられないものなのだ。このことについては後ほど詳しく検証したい。

中断は革命の条件であるといったが、ここで注意しなければならないのは、革命を目的と、中断をその手段とみなすような目的論的思考方法はここでは成立しないということだ。たしかに現行の政治体制を覆すには、その機構を根底から揺さぶりかける「思いがけない出来事」が勃発する必要

があるのだが、中断はしかしその働きの内に代替案を含んではいないのだ。つまり、旧来の政治体制が倒された後、フランス七月革命のように別の支配者が君臨するのか、あるいはロシア十月革命のように新政府が樹立するのかは中断の働きそのものとは実際のところ関係がない。そもそも中断の後に何らかの新機構が成立するという考え自体が、この中断のさなかにあって揺らぐのだ。したがってここで用いられる「革命」はあくまで国家転覆のみを意味するのであって、次の政治体制を措定することまでは考えられていない。

中断によって目的論的思考方法が破綻し、認識の仕方が変化することによって、未来は全く予測不可能なものとなる。というのも、それまでは未来に到達すべき目的があったために、現在と未来が強固に結びついていたからだ。つまり目的 - 手段の関係性は、視点を時間的にずらすことによって達成されるのだ。「目的とそれに適合する手段の選択は、目的にすでに到達してしまった時点に仮想的に視点を設定し、現在から目標実現までの因果関係を、その仮想された未来の時点の方から見返すことを含意する。」[10)]

ここで中断に対する二つの態度が明らかになる。それはすなわち「新しいもの」に対する態度であるといえるだろう。一方は、先に挙げた歴史上の革命のように、中断によって新しいものが成立することを確信している。もう一方は、中断の後に何か新しいものが起こることを知ってはいるのだが、あくまで中断の働きそのものに注目する態度である。前者は、中断を、新しいものを打ち立てるための手段と理解している。行為によって新しいものを打ち立てることができると考えるのだが、ここには新しいものが目的として、すなわち既知のものとして想定されているという矛盾をはらんでいる。一方後者は、中断をある目的に貢献する手段とは理解しない。こうして新しいものを未知のままに留めることができるのだが、しかしどのように打ち立てられるのかについても同様に知らないままである。中断をある目的に対して手段化することなく、それでいて何か新しいものを生起

---

10) 廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』、岩波書店 1998、1591 頁。句読点を改めた。

させるようなことは可能なのだろうか。そのとき、措定行為やそれを担う主体のあり方が問い直されるだろう。以下、ブレヒト、ベンヤミンそしてヴェルナー・ハーマッハーの中断概念についての思索に注目しながら、『ファッツァー』 - 断片における中断の位置づけについて考察したい。

ブレヒトの劇作における中断の重要性は、異化効果と身振り的言語の観点から充分に理解することができる。俳優演じる人物への感情移入によって観客をドラマの流れに巻き込み、舞台上で展開する事件に無批判になってしまうことをブレヒトは恐れた。そのためにブレヒトは、観客が舞台上の事件と距離を取ることが必要であると考えたのだ。『三文オペラ』で筋を展開する演技を一端中断して歌われるソングはその具体的な手法である。この試みが 1940 年以降に異化効果の理論に結実する。彼は『三文オペラ』への覚書で以下のような注意を促している。「うたう場合に一番大事なのは、『示している者〔演じる者〕が示される』ということなのだ。」[11] ここで彼が強調しているのはまさに中断の働きそのものに他ならない。なぜならば、「示している者が示される」という事態は、それまで筋を再現する目的のために組織されていた演技という手段が、中断によって目的を失い、手段そのものとして認識の対象となることを意味しているからだ。

演技を異化することの意義は、身振りの発見によってより先鋭化される。ブレヒトは身振り的言語（gestische Sprache）の創出を、自身の文学上の功績とまで評価した[12]。根本萠騰子は、身振り的言語を「言語の基礎にある姿勢」であり「言語が他者との関係的文脈（社会的文脈）で捉えられた時の表現」[13] と定義する。つまり、ここで意味を伝達するという言語の働きが中断され、発話そのもののあり方が暴かれるのだ。すると、発話行為によってはじめて人々の間に発話者と受容者としての関係が生まれることが分かる。したがって、言語を身振りの位相から観察することは、その発話を条件付ける社会的あるいは政治的諸関係を認識することにつながるので

---

11) GBA: 24 / 66. ブレヒト『三文オペラ』、岩淵達治訳、岩波書店 2006、227 頁。〔 〕内の補足は訳者。
12) 根本『身ぶり的言語　ブレヒトの詩学』、54 頁。
13) 同上、55 頁。

ある。身振り的言語、言い換えるならば発話が生じる政治的状況を示すこととなる言語のあり方は、まさに中断によって認識可能となる。

では、このような中断は、一体誰によってどのように成し遂げられうるのだろうか。ヴァルター・ベンヤミンはブレヒトの「中断」(Unterbrechung)を引用可能性の条件として高く評価する[14)]。その意味では、文章を読み、取り出した引用文に新しい文脈を付け加えるような書き手によって中断がなされるといえよう。しかし目的論的思考方法を中断し、果ては革命の条件となるような中断は、特定の個人によって本当に打ち立てられるものなのだろうか。革命がもしある一定の条件を満たす個人（たち）によってなされうるならば、革命を求めざるをえない政治状況はさほど深刻ではないように思われる。真に問題なのは、革命の捉えがたさとでも呼ぶべきものである。つまり、革命は誰によって、いつどこでどのように成し遂げられるのかが分からないのである。

ブレヒトを論じる十年ほど前、ベンヤミンは「暴力批判論」でプロレタリア的ゼネスト（ジョルジュ・ソレル）としての、つまり単なる権力者のすげかえではない仕方での革命を論じている。ハーマッハーは論考「アフォーマティヴ、ストライキ」で、ベンヤミンが「暴力批判論」で神話的暴力と「純粋な手段であり、非暴力的」[15)]と定義した神的暴力という概念を措定 - 脱措定（Setzen - Entsetzen）あるいはパフォーマティヴ - アフォーマティヴ（performativ - afformativ）の二項関係から論じている。ハーマッハーによれば、脱措定はベンヤミンにとって具体的には歴史的政治的出来事を意味していた。それはつまり法措定の、互いを凌駕し打ち消し合う行為の円環的歴史に終止符を打つ「出来事」である。これをパフォーマティヴな措定とアフォーマティヴな脱措定の関係から見てみよう。アフォーマティヴな脱措定とは、法を措定し維持しようとするパフォーマンスを打ち消すだけでなく、措定行為の条件を問いなおし揺さぶるものである。むしろ、脱措定こそ措定の条件なのである。というのも、自らに有利な法を措

---

14) ベンヤミン「叙事的演劇とは何か」、所収：『ベンヤミン・コレクション　1』、542-545 頁。

15) ベンヤミン『暴力批判論』、野村修編訳、岩波書店 1994、51 頁。

定しようとして争う者たちの根拠ないし行為の条件そのものはパフォーマティヴなものではありえないからだ。脱措定は措定的暴力を凌駕する別の措定的暴力などではなく、措定の位相からは捉えられないものである。しかしまた措定的暴力に超越してあるのでもない。ここでハーマッハーが用いる「アフォーマティヴ」が a – Form（非形）という響きを残しながら、しかし ad – Form（至形）と書かれていることに注目したい。そしてこの措定の条件としての脱措定は、措定が上手く遂行されないとき、すなわち省略・休止・中断・遅延など（Auslassungen, Pausen, Unterbrechungen, Verschiebungen etc.）[16] が生じたときにのみかろうじて知覚されるのだ。

したがってアフォーマティヴな出来事は、パフォーマティヴな行為と違って動作主を必要としていないといえる。ではどのように発生しうるのだろうか。ハーマッハーはこう述べる。

> 〔脱措定〕はある仲介者（Agent）を必要とする。しかしこの仲介者はある集合的ないし個人的な法的主体の構造をもちえないし、そもそも措定の主体であるような仲介者として構想されえない。［…］それは暴力であるだろう。そしてつまりは純粋な暴力で、しかし同時にそれゆえに非暴力であるだろう。これらすべてのアポリアは脱措定の構造に属するものなので、これらは解決しえないものである。しかし脱措定そのものはこれらアポリアの手段よりも詳細に規定可能である[17]。

措定行為が意志をもった主体によって遂行される一方、出来事としての脱措定は、行為主体とは別の構造をもつ「仲介者」によって発生するのだ。

ここで『ファッツァー』 - 断片に即して脱措定を考えたい。ファッツァーは、大胆な中断を成し遂げることによって当面の生存を勝ち取るけれども同時に自らの生存を潜伏生活へと、出口なしの袋小路へと導かざるをえない。また彼は何かを遂行しようとするとき常に遅延や中断によって行為

---

16) Hamacher, Werner: Afformativ, Streik. S. 360. In: Nibbig, Christiaan L. Hart (Hg.) : Was heißt »Darstellen«?. Frankfurt am Main 1994, S. 340-371.

17) Ebd., S. 346.

を破綻させてしまう。このような行動を取るファッツァーはエゴイストと見なされ、粛清の対象とさえなる。しかしファッツァーは、ハーマッハーがいう脱措定が必要とする「仲介者」の形象なのではないか。なるほどファッツァーは戯曲中の一登場人物ではあるけれども、個人的ないし法措定的主体などではなく、それとは別の、根底的な意味で中断を呼び起こす因子なのではないだろうか。それゆえにこそ彼のうちに革命の可能性と没落が同時に見出されうるのではないだろうか。本論文は、ファッツァーの行為のなかに主体的でない仕方で、いわば出来事としての中断を招くダイナミズムがあること、そしてそれこそ『ファッツァー』 - 断片の演劇的魅力に他ならないことを検証する。

テクストの具体的な検討に入る前に、もうひとつハーマッハーによる中断理解を見ておこう。ハーマッハーによれば、この仲介者なるものを考える際のヒントとしてベンヤミンは「暴力批判論」で言語とプロレタリア的ゼネストを挙げているという。ハーマッハーの言語についての以下の記述は、これまで本論文が論じてきた中断による言語観と一致するものである。

> 〔媒介性（Mittelbarkeit）〕が道具的言語を可能とする条件であるのと同じように、純粋な媒介と純粋な伝達可能性（Mitteilbarkeit）の言語は同時にその中断である。この中断とは同時に可能化であり、中間休止である[18)]

ここでは言語の純粋な媒介性を唯一のよりどころとして道具的言語の担い手である主体が成立する契機が含意されている。しかし言語はあくまで伝達の可能性を保障するだけで、言語によって直接的に措定行為が成立するわけではない。言語活動は常に主体が言語の媒介性、そして伝達可能性に与っていることを示すのみである。言語は常に主体の措定行為の条件としてのみ、措定行為の限界を規定する仕方でのみ存在するのである。また、ハーマッハーが結論づけるのは、ストライキについて語る者は、彼がスト

---

18) Ebd., S. 347.

ライキにすでに出会ったのか、あるいはすでにそれに与っているのかどうかということにたいして確信を持つことができないということである。なぜならば出来事として発生する中断としてのストライキは、パフォーマティヴな認識のしかたからは存在を確認することができないからである。つまり、アフォーマティヴなものは、パフォーマティヴではない何か他のもの（ein anderes）である、と定義するしかないのだ[19]。

2.2 『ファッツァー』 - 断片における脱走と潜伏

以上で中断概念の輪郭がある程度明瞭になった。中断は、目的論的思考方法を無効にし法と秩序の基礎を掘り崩す効果を内包している。そしてその中断の出自は、法措定的主体によってではなく、それとは構造的な違いを有したもので、ハーマッハーによれば「仲介者」と呼ばざるをえないものによるのであった。したがって、この仲介者を、措定行為をなす主体を認識する方法では取り逃してしまうのである。つまり私たちはこのアフォーマティヴな基礎に、常にそれを隠蔽あるいは忘却して措定行為をなすことによってしか与ることを知らない。したがって突発的出来事としての革命は、そもそも認識されることすら危ういものなのである。

さて、本章では、『ファッツァー』 - 断片の重要な箇所を分析することを通じて、ファッツァーが脱措定の仲介者の形象化であることを検証したい。まずは、ファッツァーが、一見すると措定行為を行うようにして自らの生存を勝ち取る様子を見る。次にその措定行為が実は脱措定の身振りであることが見て取れる箇所を挙げて、ファッツァーがその根底に抱く中断のあり方を分析する。

ファッツァーが成し遂げる脱走と潜伏生活は、彼らにとって唯一生存を確保する方法であったのはすでに確認した。脱走によって軍法を犯すことになるから、自国で潜伏生活を送ることを余儀なくされるのは必然的な帰結である。ここで脱走と潜伏生活をつなぐのは「穴」である。ファッツァーらの脱走は軍の秩序を無効にすることを意味している。この秩序の一時停止は、地理の問題として現われる。穴が脱走を可能としたことは、第一

---

19) Ebd., S. 358f.

期執筆の脱走の場面に端的に示されている。

> NACHT GEGEN MORGEN / *Auf zerschossenem Gelände* / *Aus einem Trichtertal taucht ein Tank* / AUS IHM EINE STIMME / Hallo! (GBA: 10 / 392)
> （夜明け／*砲撃で完全に破壊された区域／漏斗状の谷間から一台の戦車が現われる*／そこから声が聞こえる／おおい！）（139）[20]

「漏斗状の谷間」は砲撃によって地面にできた穴だと読み取れる[21]。さて、穴という形象が脱走の二面性を表わしていることはいくつかの先行研究においても言及されている。クラウス・フェルカーは『ファッツァー』の指導動機のひとつに「穴」を挙げている[22]。彼によれば、穴は同時に産道のイメージにも結びついているが、それが出産・誕生のような生産的な行為には直結しないという。また演劇学者ウルリケ・ハースは論考「ファッツァーの図面」[23] おいて、穴が脱出＝出現（Herauskommen）と崩壊（Kaputtgehen）の両者を同時に表わしていると主張する。ハースは、ファッツァーの視点が、一兵卒のそれではなくて、作戦を組む司令部の地図を前にした俯瞰的な視点に転換していることを指摘した。この転換のときにまさに穴が重要な役割を占めている。

> FATZER / So jetzt, wie ich da rauche / Und du gönnst es mir nicht / Büsching, sauf dein / Schnaps aus, der verboten ist / Und wie ich da sehe, daß /

---

20) 以下、引用部の邦訳については、津崎正行訳のミュラー版を適宜参照・修正した。引用部に対応する頁を括弧内に示した。ブレヒト『ファッツァー』、津崎正行訳（所収：『舞台芸術　18』（2014）角川学芸出版、138-178 頁）。

21) ミュラー版でも同じ文章があり、津崎訳では「砲撃によってできた漏斗状の穴から、戦車が現われる。」（139）となっている。

22) Völker, Klaus / Pullem, Hans-Jurgen (Mitarbeit) : Brecht Kommentar zum dramatischen Werk. München 1983, S. 118-121.

23) Haß, Ulrike: Fatzers Zeichnungen. In: Karschnia / Wehren (Hg.) : Kommando Johann Fatzer. Berlin 2012, S. 97-107.

Wir schon ausgestrichen sind / Oben und unten, sehe ich scharf. / Wenn ich auch schätze, ihr / Helden, daß ich genug habe und daß / Da ein Loch ist! / BÜSCHING / Das ist ein reiner Felsen / FATZER / Kriech hinein! / Da, kriech hinein! Siehst du / Nicht, daß da ein Paket / Durch die Luft kommt? Kriech / Hin, sag ich! / *Lacht* / Denn / Das ist kein Felsen, das / Ist ein Punkt. Das ist der Punkt / K a r t e 711, ihr Rindviecher! (GBA: 10 / 405f.)
（**ファッツァー**／そうして今、俺がここで煙草を吸っているようには／お前は俺からそれを受け取ることはないんだ／ビュッシング、飲み干せ／お前の焼酎を。禁止されているやつだ／そして俺がここから見るところ、／俺たちはもう抹消されている／上と下を、俺は鋭く見る。／また、俺の推測によれば、お前ら／英雄よ、充分な／穴がそこにあるんだ！／**ビュッシング**／そこはすっかり岩山だ／**ファッツァー**／這い進め！／そこを這い進むんだ！　お前には見え／ないのか、空から／一団がやってくるのが。這い／進めと言っているだろ！／笑う／というのも／それは岩山じゃないんだ、それは／一つの点だ。地図上の点／ 711 だ、馬鹿ども！）

そして彼らはミュールハイムの地下室に潜伏する。これは穴へと戻ることを意味する。ここで穴は彼らの生存を確保するというよりはむしろ出口なしの状況を表わしている。なぜならば、もし潜伏先がドイツ軍に明らかになれば、彼らに抵抗の術はほとんどなく一網打尽となってしまうからだ。先の引用と同じ稿の後半部分でコッホが吐露する閉塞感はこのような状況による。

KOCH / Was hat es genützt? Jetzt / Laufen wir wie Ratten <u>in dieser / Höhle</u> herum, die keinen Proviant / Haben. So werden sie uns noch / Herausziehen. Wir können uns / Nicht halten gegen alle. (GBA: 10 / 416)
（**コッホ**／それが何の役に立った。今／俺たちは食糧のないネズミみたいに、<u>この／穴ぐらを</u>走り回っている。／こうしていたら俺たちは奴らに／引きずり出されてしまうぞ。俺たちは／何が来ても、持ちこたえられるわけじゃない。）（169）

さて、少し戻って、同じ稿で脱走兵らがカウマンの家に到着し、今後のことについて話す場面を見てみよう。

> KOCH / Ja, jetzt geht's bald los / Wir müssen nur abwarten. / BÜSCHING / Und durchhalten. / *Lachen*. / FATZER / Wenn es los geht, müssen wir / Zusammen sein. / KOCH / Wenn sie uns einzeln fassen / Dann sind wir hin. Wir / Dürfen nicht weiter, hier an / Der Grenze / sind sie am unzu- / friedensten und: wo Fabriken / Sind! / FATZER / Ja Hier. Dann beschließen / Wir also / Daß wir beisammen bleiben / Und du gehst nicht nach Passau / Koch / BÜSCHING / Und ich nicht nach Liegnitz. (GBA: 10 / 408f.)
> （コッホ／ああ、もうすぐで起こるぞ／俺たちはただ待ってりゃいいんだ。／ビュッシング／そして耐え抜くんだ。／笑う。／ファッツァー／事が起こるときには、俺たちは／一緒にいなければならない。／コッホ／もし奴らが散り散りの俺たちを捕まえるなら／その時俺たちはお終いだ。俺たちは／先に行くことはできない、この／国境で／皆が極めて不／満足だ、そして工場が／ある！／ファッツァー／ああ、ここに。さて決まりだ／俺たちは／一緒にここに留まる／そしてお前はパッサウには帰らない／コッホよ／ビュッシング／そして俺はリーグニッツには帰らない。）（152）

さらにこの会話に続いてファッツァーの演説が始まるように、ここではファッツァーのリーダーシップが目立つ。彼は仲間の意見を斟酌し、決議をする。しかもそれは極めて重要で、仲間に対して強い拘束力を持つ。こうしてぎりぎりの生存が確保されるのだ。しかし、ファッツァーが本当に措定行為を行ったのかについては注意しなければならない。というのも脱走も潜伏生活も、法措定的主体として振舞うことを揺さぶり、限界の地点へと人を導くからだ。コッホが言っているように、ここから彼らはただひたすら待つこととなる。

待つことは措定行為にはそぐわない。なぜならば、待つ行為そのものによって現状が変化し障害が除去されることはないからである。この行為の

持つ意味はベンヤミンの神話的暴力としては理解されないのだ。確かに待つ行為は対象を持ちはするが、それに直接働きかけることは不可能だ。むしろ対象に対して影響力を持ちえないこと、この対象との距離こそが待つという行為の本質である。その意味で、待つことは、措定行為の埒外に位置する出来事がまだ起こっていないことを示し、それと関係を持とうと試みる行為だと解釈できるだろう。レーマンは論考「『ファッツァー』についての試み」で、待つことが『ファッツァー』 - 断片の基礎的身振りであると指摘している。

> 脱走の基本的なモデルはほとんど強制的に〈あいだ〉のドラマトゥルギーに帰結する。[…] このような状況において『ファッツァー』 - 劇の主たる内容と基本的身振りが、待つことになるのは当然のことである。[…] 行いは脱走、行為者は待つ者、演劇の本来的なテーマは崩壊となる[24)]

ファッツァーらが待つことのみをせざるをえなくなったのは、脱走によって彼らが兵士でも民衆でもない〈あいだ〉の立場を得たからであった。それゆえに彼らの革命への態度は曖昧となり、措定的ではなくなるのである。彼ら自身ができることはただ蜂起を手助けすることだけなのだ――「彼らは四人で、彼らが待ち望む蜂起の手助けをすることができるだろうと期待した。」(179)(Zu viert hofften sie in diesem von ihnen erwarteten Aufstand mithelfen zu können. (GBA: 10 / 469))蜂起を手助けするために待つ行為は、しかし、革命を措定するどころか、脱措定的状況を生み出してしまう。このことには、待つ行為の基礎にある時間認識の中断について考察する必要がある。

2. 3 『ファッツァー』 - 断片における時間的中断、エゴイズム

ファッツァーの地理的認識転換についてはすでに述べた。ファッツァーは他にも時間認識について卓越的な転換を示している。『ファッツァー』

---

24) Lehmann: Das Politische Schreiben, S. 299f.　強調原文へ。

において革命としての中断はついに起こらないが、時間認識の中断は確実に起っている。それは革命の前段階として必須なものである。

さて、ファッツァーは演説をする。仲間たちに対する彼の演説は第一期から執筆されている。さらにファッツァー・コメンタールではファッツァーの演説の有用性が語られているので、「演説」が内容としても、演劇的身振りとしても『ファッツァー』において中心的な位置を占めていることは疑いようがない。前項で指摘した第二期のシークエンスの演説でファッツァーは「新しい時代が始まる」（Eine neue Zeit anfängt (GBA: 10 / 409)）といい、そこに民衆の蜂起を期待した。そのとき彼らの姿かたちは「群衆人間」（Massemensch）という聞き慣れない言葉で呼ばれる。なぜならば、蜂起はそれまでの民衆の主体的行為によっては成し遂げられないからである。群衆人間は未知の存在者でなければならない。「そして今まで見たことのなかった人々が／あたりを歩くのを見た。それが／来るんだ。」（Und man sieht Leute herumgehn, die / Man sonst nie gesehn hat, das / Kommt (GBA: 10 / 409)）また、第三期の構想の中に書かれた台詞の断面で――ファッツァーにあてられてはいないが――待望される群衆人間は「動物」と呼ばれ、その捉えがたさが目立っている。

> Wir aber wollen uns / Setzen an den Rand der Städte und / Auf sie warten, Denn jetzt muß / Kommen eine gute Zeit; denn jetzt bald / Tritt hervor das neue Tier, das / Geboren wird, den Menschen aus- / zulösen. (GBA: 10 / 427f.)
> （しかし、我々は／都市の周辺に座って／彼らを待とう。なぜならば、これから／良い時代が来るにちがいないのだから。間もなく／新しい動物が現れるのだから。それが／生まれるのは、人間を解／放するためなのだ。）（153）

この新しさとは何なのだろうか。同じく第三期の断片稿を全文引用したい。

> FATZER / Mich lähmt das Morgen und / Dies unverbindliche Heut! So

sitzend / Zwischen noch nicht und schon nicht mehr / Glaub ich nicht, was ich denk! / Sicher ist's ein Irrtum, schon morgen / Klar! Warum also / heut reden? Was / Nützt dies Bootbauen bei vertrocknen- / dem Fluß? Wenn ich euch essen / Seh, seh ich hinter euch andre verdauen / Euch unähnlich; aber mich seh ich nicht essen. Ich hör eure Stim- / men nicht vor dem Geräusch vieler / Schritte, solcher, die ich nicht kenn. / Aus vielen runden Mäulern fallen / Große viereckige Worte, woher sind sie? / Mir scheint, ich bin vorläufig / Aber was / läuft nach? // Er verbietet, daß sie ihn verstehen. (GBA: 10 / 440)

（ファッツァー／俺をしびれさせるのは明日と／この、なにとも繋がらない今日だ！　こうして／まだないと、もうないの間に座っていると／考えていることが信じられなくなる！／たしかにそれは間違っている、明日にはもう／明確だ！　では、どうして／今日話すのか？　なんの／役に立つのか、干上がろうと／する川縁でこのボートを作ることが？　俺はお前たちが飯を食っているのを／見ていると、お前たちの後ろで他のやつがそれを消化しているのが見える／そいつはお前たちとは似ても似つかわないものだ。しかし俺は自分自身が飯を食っている姿を見ることができない。俺はお前たちのこ／えが聞こえない、俺が知らないやつらの立てる／多くの足音のために。／多くの丸い口から落ちるのは／大きな四角ばった言葉だ、それはどこから来た？／俺は先触れであるようだ／が、なにが／後から来るんだ？／／（彼は、彼らが彼自身を理解することを禁止する。））（153）

ファッツァーは、「まだない」未来と「もうない」過去のあいだ、すなわち現在にいる。今日は明日とは地続きではない。なぜならば正しいことが未来において初めて成立するのなら、現在の価値判断は偽りでしかないからだ。ファッツァーが未来の革命を「新しい」と評価したことの意味は極限にまで強調され、現在の否認という背面が露わになる。しかしもちろん過去へと後戻りすることは許されない。また同時に自分の現在の行為が未来の基礎となることについても確信できない。ファッツァーの最後の言葉「俺は先触れであるようだ／が、なにが／後から来るんだ？」は未来の予

測不可能性を表わしている。また、ファッツァー・コメンタールにも、以下のような記述がある。

> E[25] : Alles, was heute gedacht wird, ist nur, damit gut erscheine, / was alles gemacht wird. Alles, was heute gemacht wird, ist / falsch. Also ist alles, was heute gedacht wird, falsch. (GBA: 10 / 528)
> （E ：今日考えられるすべてのものは、作られるすべてのものを良いものとして／思うためだけに存在する。今日作られるすべてのものは／間違っている。それゆえ今日考えられるすべてのものは、間違っている。）

ここで論述されているのは、工作物を是認するために思考が形成されるという状況である。しかし、ファッツァーの認識と同じように、今日すでに作られた物は未来においては偽である。したがって、工作物に付随する思考もまた偽となるのだ。こうして過去と現在は、未来の新しさ、真の正しさによって、偽と判断される。ここでもやはり強調されるのは、現在なされる行為が、未来において資することがないばかりか、常に否定されるということである。

現在の困窮した事態を打破してくれるよう革命に希望を託すことは、現在の問題が真の意味で新しく正しい未来においてしか解決されえないという認識の上に成り立っている。革命の意義を最大限認めて、自らの待つという行為に正当性を与えようとすることは、現在実行されうる行為や思索を否定することと表裏をなしている。ファッツァーの卓越性は、過去現在未来を等質に結び合わせる直線的時間認識を中断したことにある。これと同時に目的論的思考方法も機能しなくなる。こうして革命の可能性が保証されるのだが、同時にそれは革命を主体的かつ措定的に成し遂げることの不可能性を宣言することでもあったのだった。こうして、現在におけるファッツァーらの行為は中断され、脱措定的に待つことを余儀なくされるの

---

25) この「E」を、全集版は „Erläuterung“（解説）あるいは „Erklärung“（説明）の頭文字だと解釈している。

だ。

ファッツァーの第一の逸脱行為としての脱走は彼らの生存をまず確保したことから、必要不可欠のものではあった。しかし、第二、第三と飽くことなくなされる逸脱行為は彼ら全員の破滅を招き寄せる。ファッツァーを本質的な中断の仲介者と見る本論文のテーゼは、ファッツァーが常に犯す逸脱行為の契機を明かすことによって裏付けられるであろう。それは、以下に述べるように、ファッツァーをエゴイストと呼ぶことによって何が示されているのかを探求することである。

これまでに指摘したファッツァーの卓越的な身振りと比べると、仲間に対して彼が食糧確保を約束する場面は奇異に映るかもしれない。それは契約によって法措定的主体を形成することに他ならないからである。しかし注目すべきは、彼に端を発するあらゆる試みは挫折するということだ。致命的な失敗を幾度も起こして反省しないばかりか、より悪い方向へと舵を切ろうとするファッツァーがエゴイストと呼ばれ、粛清の対象となるのはもっともな帰結である。そればかりか、ファッツァーがエゴイストであることは、テクスト外でブレヒト自身によっても宣言されている。『試み』の前書きに正式なタイトルとして「エゴイスト、ヨーハン・ファッツァーの没落」[26] と記されているからだ。しかしファッツァーは本当に措定的個人としてのエゴイストなのだろうか。実際の上演で『ファッツァー』が扱われた例で演劇学者ティム・シュースターは、ジャン＝リュック・ナンシーの「エゴ」定義を参照しながら、ファッツァーのエゴは措定的主体の保存ではなくて、個人のその都度の出来であることを指摘する。

> 〔上演において〕エゴは自己同一的で不変の主体ではなく、むしろジャン＝リュック・ナンシーの意味における、「自らを常に分節化する」したがってあらゆる特定の契機毎に今ここにおいて自らを分節化し露呈するエゴなのである。[27]

---

26) Brecht, Bertolt: Versuche. Berlin 1959, S. 6.　ちなみに、ミュラーもこのタイトルを採用した。

27) Schuster, Tim: Räume, Denken. Berlin 2013, S. 270.　強調原文へ。

以下では『ファッツァー』 - 断片のテクストの次元で、ファッツァーのエゴを検証したい。ひとまずエゴイストを私利私欲のためにのみ行動する者と定義しよう。それを言い換えるならば措定的個人の維持という目的のために、倫理的規制を顧みずに、あらゆる手段を動員するということであろう。その点でいえば、ファッツァーを措定的主体として認めることが難しいことはすでに明らかとなったので、ファッツァーがエゴイストでないという主張は首肯できる。しかし、それでもファッツァーの脱走兵らの秩序を破壊するほどの向う見ずさはエゴイストの特徴そのものでもあるように思われる。

ファッツァーが時間観念の中断によって、過去と未来、どちらにも接続しない現在を取りだしたのはすでに見たとおりである。したがって彼が目的論的思考方法をもとにして行動を起こしえないことも同時に明らかである。では、どのような行動原理をファッツァーは有しているのだろうか。それは刹那的な欲望（Lust）である。特に登場人物に振られていないテクストに「彼がするのはただしたいと欲することだけだ。」（Er tut nur das, wozu er Lust hat. (GBA: 10 / 464)）というのがある。また第一期の記述ですでに「連帯。彼らの企てが始まる。／犯罪に至ってようやく彼の欲は満足する」（170）（Solidarität. Ihr Unternehmen ein Anfang. / Nur bis zum Verbrechen reicht seine Lust aus (GBA: 10 / 391)）として彼の欲望が共同体を危機に陥れるという『ファッツァー』の基本的な筋が示されている。またファッツァーがカウマンの妻を誘惑する場面では欲望を根拠に自身の正当化を図っている。こうしてファッツァーの欲望は脱走兵たちの共同体と対立する。この限りでは、個人対共同体の対立関係として、つまりファッツァーをエゴイストと定義することは可能なように思われる。

しかし同時にファッツァーは、この人間的欲望の向う見ずさが戦争を助長するものであることを見ていた。彼はこの戦争が国家間の争いではなく、ブルジョワジーによるプロレタリアートの搾取でしかないことを見抜く。しかしブルジョワジーが人間的欲望を利用して戦争を続けていることを彼は演説の中で指摘する。

Und alle diese fechten / Gewohnt, nach einem Plan zu handeln / Den sie nicht kennen, eingeteilt / Zu werden ist ihnen gleiche Lust als / Für Weiber gevögelt werden; [...] Die geordnete Masse der Menschheit / Zu falschem Zweck aus / und so /Wird mißbraucht die neue / Kunst und Lust am Gleichtakt. (GBA: 10/474)

（そして、こいつら全員が戦っているのだが／自分たちが知りもしない／計画に従って行動することに慣れきっている。／やつらは別々の陣営に分けられることを欲している／女たちがセックスをしたがるのと同じように。［…］秩序立てられた人間の群れが／間違った目的に向かい／このようにして／新しい技術と欲望が／ともに悪用される。）（142）

この引用箇所で言うところの「欲望」は、先に挙げたそれとは別種のものであるように思われる。というのも、こちらの欲望はブルジョワジーの操作の対象として利用されているからだ。ここおいて欲望に従うプロレタリアートは無批判に戦争を継続させている。一方でファッツァーの欲望は、むしろ戦争の中断と関わる。後者の欲望の特異さは何よりもラディカルさにある。ここにおいてファッツァーの主張する欲望は一個人のものではなくなって、世界的な規模を有するに至るのだ。

ファッツァーの欲望は部分的には仲間たちからも称賛されていた。「コッホ／彼が自己中心的なのは／良いことだ！　彼は大きな自己を持っていて、それは／俺たち四人にとって充分なのだ。そして俺たち四人のためにこそ／彼は自己中心的なのだ！　奴は／俺らを助けられるんだ！」（KOCH / Daß er ichsüchtig ist, das ist / Gut! Er hat ein großes Ich, das reicht / Für uns vier aus und für uns vier / Ist er ichsüchtig! Der / Kann uns helfen! (GBA: 10 / 442)）しかしそれは彼ら共同体の存続とファッツァーの自己保存欲求が上手く噛み合っている時だけである。仲間たちは初めファッツァーの自己中心的態度を危険視していない。なぜならば、目的論的思考方法によれば、目的達成を阻害する欲望の充足は退けられるべきだからである。しかし彼は過去とも未来とも接続しない現在にあって欲望以上の行動原理を見出すことができないから、欲望の質がそもそも彼らの想定していたものとは違

うのだ。それゆえに革命のため、共同体維持のためといった理由は欲望を退けることができないばかりか、むしろそれらによる抑圧によってかえってそれは強い反発力を持つのである。ファッツァーの欲望は留まることを知らず、根源を否定し、全てを無目的で自己破壊的な方向において平等にしようとする意味で、アナーキズムやカオスとして描写される。「ファッツァーが信じているのは、盲目的に怒り狂う偶然、『あるのは残ったもの』、カオス。」（172）（Fatzer glaubt an den blindwütenden Zufall, »was da ist, ist Übergebliebenes«, das Chaos. (GBA: 10 / 468)）「ファッツァーの絶望／ファッツァーのアナーキズム的推論：すべては同じだ。」（Verzweiflung des Fatzer. / Fatzers anarchistische Folgerungen: es ist alles gleich. (GBA: 10 / 475)）

> FATZER [...] Dieses Fleisch ist faul und nicht mehr / Lohnt sich's für einen Mann / Wie mich, etwas zu übernehmen, was Heute faul und morgen unbekannt. / Doch bin ich geboren mit Hang zum Nehmen / In aller Welt. (GBA: 10 / 496)
> （ファッツァー［…］この肉は腐ってる。そして俺のような男が／今日は腐っていて、明日は不明なことを／何か引き受けても、もはや報われることはない。／だが、俺は生まれつき、引き受けることを好む／世界中のあらゆることを。）（165）

こうしてファッツァーは一脱走兵としての形象を突き破って、人間的欲望の形象となるのである。このような状況においてコッホ――後にコイナーという名前に変更される――が潜伏生活の存続のためにファッツァーに対立し、抹殺しようと企てるのはもっともである――「コイナーはアナーキズムとラディカリズムと日和見主義と戦う」（Keuner bekämpft Anarchismus, Radikalismus und Opportunismus (GBA: 10 / 492)）。そしてこの計画は徒労に終わる。第四期に書かれたファッツァーの演説によって、ファッツァーと仲間たちの対立は、人間的欲望とそれを否定する機械的従順さとの決定的な対立として解釈される。

> FATZER / Ich bin gegen eure mechanische Art / Denn der Mensch ist kein

Hebel. / Auch habe ich starke Unlust, einzig zu tun / Von vielen Taten die, welche mir nützlich. Aber Lust / Zu vergraben das gute Fleisch und zu spucken / In das trinkbare Wasser. / Dies ist nicht einfach. / Ihr aber rechnet auf den Bruchteil aus / Was mir zu tun bleibt, und setzt's in die Rechnung. / Aber ich tu's nicht! Rechnet! / Rechnet mit Fatzers Zehngroschen-Ausdauer / Und Fatzers täglichem Einfall! / Schätzt ab meinen Abgrund / Setzt für Unvorhergesehenes fünf / Behaltet von allem, was an mir ist / Nur das euch Nützliche. / Der Rest ist Fatzer. (GBA: 10 / 495)

（ファッツァー／俺は、お前たちの機械みたいなやり方には反対だ。／人間は梃子じゃないんだからな。／たくさんある行為のうち／自分の役に立つことだけをするのも大嫌いだ。だが／上等の肉を埋め、飲み水に／つばを吐きたくなる欲／こいつは単純じゃない。／しかし、お前たちは、俺がまだしていないことを／細部に至るまで計算し、それを考慮に入れるんだ。／だが、俺はそんなことはしない！　計算するがいい！／計算しろ、ファッツァーの十グロッシェンの忍耐力と／ファッツァーの毎日の思いつきを！／俺の深淵を測り／予想外のことがあったら、五と書いておけ／俺にあるもののうち／お前たちの役に立つものだけを取っておけ。／その残りがファッツァーだ。）（156）

ここで欲望は有用性では汲み尽くせないものであることが強調される。仲間たちに繰り返し執拗に計算（rechnen）を迫ることによって、ファッツァーは自身が常に有用性の外、計算の埒外にあることを宣言する。それに加えて彼自身に関する簡潔な宣言が演説の冒頭と最終行に挟むように呈示されることも、ファッツァーという形象の法的個人の枠組みを超え出る途方もなさを示している。以上で見てきたように、ファッツァーを私利私欲のために共同体を脅かす「エゴイスト」と定義することはできない。というのも彼の欲望のラディカルさは、人を機械の一部分として組織してゆく戦争のさなか、「人間的なもの」[28] を獲得しようとする試みだろうからだ。ここでいう「人間的なもの」とは、第一に本能的に欲望を持つ生物として

28) Vgl. GBA: 10 / 486.

のそれである。この意味において個人対共同体の図式は崩壊せざるをえない。なぜならば、彼は法措定的個人として欲望に従うのではなく、あらゆる目的が中断され、人間的なものそのものが認められるような状況を作り出す出来事として振舞うからである。

さて最後に、第三期最終場における粛清の場面を見てみよう。仲間のもとを離れていたファッツァーがドイツ軍に包囲された仲間の潜伏先へと帰って来る。ここで彼らはファッツァーを縛り上げ、自らの粛清を了解するようファッツァーに迫る。しかし彼はこれを拒否して、以下のように言う。「ファッツァー［…］俺は／くたばるつもりはないぞ！／今はまだ！／こんなふうには！／俺はファッツァーだ／等」（176）（FATZER [...] ich / Will nicht verrecken! / Jetzt noch nicht! Und / Nie so! / Ich bin der Fatzer / Usw. (GBA: 10 / 449)）この台詞をもって最終場は終わっている。ここでファッツァーは、了解を拒否することによって、仲間たちが没落を目前にしながら試みる最後の措定行為を中断する。その行為とは、共同体の秩序を――たとえ一瞬であっても――措定し、維持しようとするものだ。ドイツ軍の銃撃のさなかにあって彼の死は確実にもかかわらず、一向に噛み合わない会話のなかで、措定的個人として振舞うことを拒否する。ここに脱措定の出来事が生じるのである。「俺はファッツァーだ」という存在の宣言はとても奇異な言葉である。なぜならば、縛りあげられた状態で簡潔に自らの存在を宣言するこの言葉は、仲間たちを説得したり威圧したりする効力を何ら持たないからだ。この宣言は、措定的主体の次元からでは充分に捉えられないものだ。ここにおいて正にあらゆるものを中断する出来事の形象としてのファッツァーが書き込まれている。したがってこの宣言の後にはもはや、ファッツァーが仲間に銃撃されたとか、ドイツ軍がそれより先に突撃してきたとかいったト書きさえ書かれえない。その替わりに終結を棚上げする「等」という作者のメモが書かれている。これによって文字通りテクストの執筆も中断される。これはただの言葉遊びではなくて、一つ『ファッツァー』の断片性を証し立てる重要な出来事であろう[29]。

---

29) これをフランク・トムゼンらは、作者ブレヒトのためらいだと解釈している。彼らは、『夜打つ太鼓』以降の、バールのような人物を超克し、没個性的な

3　結論

本論文は、『ファッツァー』 - 断片を〈中断〉の位相から読みとることによって、作者ブレヒトが本作に大きな可能性を見出しながらも未完成のまま執筆を中断したことの意義を探ろうとした。何よりも魅力的であったのは、登場人物ファッツァーが、措定行為をなす法的主体ではなく――ハーマッハーの論によれば――措定の条件となるアフォーマティヴな出来事としての脱措定を生じさせる「仲介人」の形象であるということであった。それゆえにファッツァーを巡る事件は主体間の争いという意味でのドラマとしては成立しなかったのだ。そこでブレヒトは、創作の途中で『ファッツァー』を登場人物の対話によって完成させることを拒んで方向転換を試みたのだ。例を挙げれば、彼はコロスを――しかも互いに異なる意見を主張する複数のコロスを――登場させたり、「ファッツァー・コメンタール」と題して『ファッツァー』を繰り返し演じることによって生じるであろう教育の問題を探求した。こうして、彼は劇作家の限界と演劇実践家の可能性へと思索を進めていくのであった。これこそブレヒトが『ファッツァー』 - 断片の核に見出した徹底的な〈中断〉の魅力に他ならない。

本論文では紙幅の都合上、演劇実践の可能性について立ち入って議論をすることができなかった。しかしこのような演劇に対するブレヒトの問題意識と、ファッツァーの振舞いを脱措定の出来事として書くこととが表裏一体のものであることは充分に示せただろう。

※本論文は、平成 27 年度慶應義塾大学大学院博士課程学生研究支援プログラムによる研究成果の一部である。

主人公を描こうとするブレヒトの執筆意図が、ファッツァーという強烈な形象によって中断してしまったのだと読み取る。Thomsen, Frank u.a. : Ungeheuer Brecht. Göttingen 2006, S. 80.

Fatzer als Ereignis

— Unterbrechung in Bertolt Brechts Stückfragment »*Fatzer*«

ISHIMI, Shu

Diese Arbeit beschäftigt sich mit der Textanalyse von Bertolt Brechts »*Fatzer*«-Fragment (verfasst 1926-30) unter dem Aspekt der Unterbrechung. Durch die Analyse wird erklärt, warum das Fragment trotz oder gerade wegen seiner Unfertigkeit Brecht lebenslang anzieht.

Der Begriff der Unterbrechung betrifft ein Zweck-Mittel Verhältnis, einen neuen Betrachtungsmodus. Mit der Unterbrechung der zum Zweck geordneten Mittel wird ein Mittel nicht mehr nach der Nützlichkeit für den Zweck beurteilt, sondern danach, ob es richtig oder gerecht ist. Ein solcher Modus muss die Voraussetzung der Revolution sein. Denn er schätzt das Menschenleben höher als den staatlichen Mechanismus, der die Menschen für sein Ziel ausbeutet. Brecht beabsichtigt, dass der Zuschauer im Theater für die Revolution diese neue Denkart einübt und prüft. Dafür erfindet Brecht seine Theatertheorie, d.h. den Verfremdungseffekt und die gestische Sprache. Beide bewirken beim Zuschauer, dass er jede Gebärde der Schauspieler und die Handlung des Stücks vor ihrem gesellschaftlichen Hintergrund betrachten kann. Beim Begriff der Unterbrechung handelt es sich um das Neue. Durch die Unterbrechung der Ordnung kann das unvorhersehbare Neue allererst vorkommen. Der Philosoph Werner Hamacher unterstreicht die Unvorhersehbarkeit des Neuen, indem er die „afformative“ Entsetzung als Bedingung des Setzens versteht. Das afformative Ereignis kann nicht von einem Betrachtungsmodus erkannt werden, der von einem auf dem performativen Akt beruhenden Subjekt ausgeht. Nach Hamacher bedarf die Entsetzung des

„Agenten“, das heißt, sich geschehen zu lassen. Johann Fatzer, der die Revolution in der Zukunft abwartet und gleichzeitig mit den Deserteuren unterzugehen droht, muss dieser Agent sein.

Die These „Fatzer als Agent der Entsetzung, also als Ereignis“ wird in dieser Arbeit textnah erhärtet. Zuerst scheint es so, dass Fatzer als das setzende Subjekt die Desertion durchführt. Aber das Leitmotiv „Loch“ (aus dem er und die Kameraden das Schlachtfeld verlassen) bedeutet, in die Zwänge eines Lebens in der Verborgenheit zu geraten. Im verborgenen Leben können die vier Deserteuren nur den Aufstand des Volkes abwarten, sodass ihre Abweichung im Nachhinein gerechtfertigt wird. In diesem statischen Zustand schwindet die dramatische Dramaturgie und wird ersetzt durch die Dramaturgie des „Zwischen“ (Hans-Thies Lehmann). Daher ist Fatzers Handeln kein setzender Akt, sondern das Geschehen, in dem man nichts setzen kann. Fatzers stärkste Unterbrechung betrifft die Zeitform. Sie wird unterbrochen, sodass das Jetzt weder eine Folge der Vergangenheit noch der Ausgangspunkt zur Zukunft ist. Mit dieser Unterbrechung setzt er die Revolution in die Zukunft, aber gleichzeitig verliert er den Boden zu setzen. In der Unverbindlichkeit ist nur die Lust seine Motivation. Aber das Leitmotiv Lust bedeutet nicht, dass Fatzer Egoist ist – obwohl Brecht einmal in einer Zeitschrift „Untergang des Egoisten Johann Fatzer“ schreibt –, denn Fatzers aggressive Tat vergrößert die Lust zum allgemeinen Recht der Menschen. Fatzers Haltung, in der grausamen Situation des Krieges Menschlichkeit auf Lust zu gründen, ist keine eigenwillige, sondern eine an die Revolution anknüpfende und unentbehrliche. Deswegen gibt es keinen dramatischen Konflikt zwischen dem egoistischen Fatzer und dem zur Revolution leitenden Koch/Keuner. In der „letzten Szene“, die Brecht unterbricht, lehnt Fatzer seine Liquidierung ab und ruft „Ich bin der Fatzer“. Diese Darstellung seines Daseins dient nicht so sehr dazu, seine Kameraden zu etwas zu überreden. Er vernichtet vielmehr ihren letzten Versuch, für die kleine Gemeinschaft etwas zu setzen, und macht sein schieres Dasein stark. Er ist eben ein Agent der Entsetzung.

Durch die Unterbrechung in der Fatzer-Geschichte gerät Brecht an die Grenze eines „normalen“ Theaterstücks. Um dieses Schreibproblem zu lösen, benutzt er z. B. die Chöre und fügt die theoretischen Texte „Fatzerkommentar“ an, die vor allem über die pädagogische Nützlichkeit der Theaterpraxis nachdenken.